

廉頗藺相如列伝と二つの主題（二）

杉山 寛行

一

あるまとまりを持った逸話としての断片、それらが互いに有機的な関聯を有しながら更に大きな物語を構成する、その時、その中核をなして断片や物語を統合するもの、それを主題と呼ぶことにするなら、主題は物語のそれぞれのレヴェルにおいて見出すことができ、個々の断片の主題について語ることもできるし、また物語全体を統べる主題について論ずることもできるはずである。

廉頗藺相如列伝について言うなら、藺相如、趙奢、李牧の伝、更には趙括、他の伝に錯綜しつつ語られる廉頗の伝でさえ、それぞれの固有名詞によって導かれ

統合された物語としてこれらを見るなら、そこには一つの共通した主題が奏でられている。そのことについては、すでに前稿「廉頗藺相如列伝と二つの主題（一）」（『名古屋大學中國語學文學論集』第十輯）において述べた。しかし同時にこの列伝を全体として見るなら、そこには各々の伝には包括されない部分があり、また「廉頗藺相如列伝」と題されながら、廉頗、藺相如の二人が死に物語から消え去ってもなお物語が継続されていくこと、何よりも廉頗の伝が独立せず、他の伝に絡み合うように展開していくことなど、固有名詞の下に統合された四人、もしくは五人の独立した伝の集まりとしてのみ物語全体を理解するには困難な要素が多々ある。

廉頗藺相如列伝は、列伝としては異例に紀年が丁寧に施されている。惠文王、孝成王、悼襄王、趙王遷と、惠文王から趙王遷に至る趙王の交代はほぼその都度明示されており、紀年も事件に即して付されている。個人の人伝として見るなら、確かに廉頗伝は他の伝のように独立せず、錯綜した様相を呈してはいるが、個人の伝を越えて全体として見るなら、意図の明確な一部の遡行を除いて、記述は概ね時間軸に沿って進められており、記述のかたちとしてはむしろ線条的なのであって、錯綜するところはない。

以下それらの記述を確認しておこう。

- 一 趙惠文王十六年、廉頗為趙將、攻齊大破之、取陽晉。(廉頗)
- 二 趙惠文王時、得楚和氏璧。(藺相如)
- 三 其後秦伐趙、拔石城。(藺相如)
- 四 明年、復攻趙、殺二萬人。(藺相如)
- 五 「明年」、秦王使使者告趙王：「會於西河外涇池。(藺相如)」
- 六 是歲、廉頗東攻齊、破其一軍。
居二年、廉頗復伐齊幾、拔之。

後三年、廉頗攻魏之防陵、安陽、拔之。
後四年、藺相如將而攻齊、至平邑而罷。

其明年、趙奢破秦軍閼與下。(藺相如―趙奢)

七 後四年、趙惠文王卒、子孝成王立。

七年、秦与趙兵相距長平。(趙奢―趙括)

八 明年、秦兵遂困邯鄲歲余、幾不得脱。(趙括)

九 自邯鄲困解五年、而燕用栗腹之謀。(廉頗)

十 居六年、趙使廉頗伐魏之繁陽、拔之。

趙孝成王卒、子悼襄王立。使樂乘代廉頗。(廉頗)

十一 其明年、趙乃以李牧為將、而攻燕拔武遂、方城。

(廉頗―李牧)

十二 趙悼襄王元年、廉頗既亡入魏、趙使李牧攻燕、

拔武遂、方城。(李牧)

十三 居二年、龐煖破燕軍、殺劇辛。(李牧)

十四 後七年、秦破殺趙將扈輒於武遂、斬首十萬。趙乃以李牧為大將軍、擊秦軍於宜安、大破秦軍。

(李牧)

十五 居三年、秦攻番吾、李牧擊破秦軍、南距韓、魏。

(李牧)

十六 趙王遷七年、秦使王翦攻趙、趙使李牧、司馬尚

禦之：趙王乃使趙蔥及齊將顏聚代李牧、李牧不

受命、趙使人微捕、得李牧斬之、廢司馬尚。(李牧)

十七 後三月、王翦因急擊趙、大破、殺趙蔥、虜趙王遷及其將顏聚、遂滅趙。(末尾)

括弧内は、その記述の存在する伝を示す、もしくはは伝と伝との繋ぎとして記されていることを示す。例えばその六は連続した記述として示され、その機能としては藺相如伝と趙奢伝を繋ぐものとしてある。しかし直接にはいずれの伝にも包括されてはいない。換言するなら、それぞれの伝の主題の下に、他の記述と関聯され結びつけられているのではなく、質を異にする他の主題の下に統合されているものと言えよう。

ところでこれらの記述には整合性を欠く部分もあるので、ひとまずその整理をしておくことにする。

二三

一 「惠文王十六年」は、趙世家にも同年のこととしているが、「陽晉」は「齊昔陽」とする。六国年表は十五年のこととして「取齊昔陽」とする。ただし一本には「淮北」と作る。梁玉繩『史記志疑』は「十五年」、地名は「淮北」としている。

二 和氏の璧をめぐる事件は、廉頗藺相如列伝の中心的な事件の一つであり、趙秦の間の重大な事件に

も拘わらず、不思議なことに史記の他の個所には見出せない。従つて「趙惠文王時」が何時を指すかは明確ではない。しかし、三「其後秦伐趙、拔石城」が惠文王十八年のことであることは明らかなので、そこからすれば惠文王十六(五)年から十八年の間のことと推測される。

三 六国年表、趙世家ともに惠文王十八年のこととする。「石城」について梁玉繩は疑問を差し挟んでいるが、今は触れない。

四 三が惠文王十八年であれば、「明年」は惠文王十九年。六国年表も同じ、ただし「斬首二万」は「三万」に作る。

五 西河澠池の会は、六国年表は惠文王二十年の条に「与秦会澠池、藺相如従」とし、趙世家も同じ。廉頗藺相如列伝は、四を直接承けて記述しているが、他の記述を参照してみれば、四の事件の翌年のことであり、梁玉繩は「明年」が脱落しているとしている。時間系列を明確にするため、今仮に「明年」を補つておく。

六 「是歳」は五を承けて惠文王二十年。趙世家に対応する記述を見出すことができる。ただし趙世家の記述では、事件が五に先んじて起こったかの如くに

読める。

趙世家は恵文王二十三年のこととして「十二月、廉頗將攻幾、取之」と記す。それに拠れば、「居二年」は「居三年」とするのが相応しい。梁玉繩も同じ。

趙世家は恵文王二十四年のこととして「廉頗將攻魏房子、拔之・・又攻安陽。取之」と記す。それに拠れば、「後三年」は前項と連携させながら「後一年」とするのが相応しい。梁玉繩も同じ。梁は更に「防陵」について、徐廣は「房子」と作り、索隱は「陵」の字は誤りであるという説を挙げて、「防、房古通」としている。

「後四年」は前項に従うなら、恵文王二十八年のこと。六国年表、趙世家のいずれとも対応する。

「其明年」は従って恵文王二十九年。これも六国年表、趙世家のいずれとも対応する。

七 「後四年」は六を上記の如く是正して計算すれば、恵文王の卒するのは、その三十三年となる。趙世家「三十三年、恵文王卒、太子丹立。是為孝成王」。

「七年、秦与趙兵相距長平」について、六国年表は、孝成王五年の項に「使廉頗拒秦於長平」とし、六年の項に「使趙括代廉頗將、白起破括四十五万」と記す。秦昭王四十七年（趙孝成王六年）の項には「白起破趙長

平、殺卒四十五万」とする。この記事は白起王翦列伝に詳しく、それに拠れば、事件は秦昭王四十七年（趙孝成王六年）に起こり、その七月、趙括を廉頗に代り將軍につけた、と記す。趙世家に「廉頗將軍軍長平。

七年、廉頗免、而趙括代將」とあるのは、梁玉繩が指摘するように「七年」を「七月」とするのが正しい。廉頗藺相如列伝「七年、秦与趙兵相距長平」の記事も、「六年」とすべきであるかもしれない。その方が八「明年」ともよく対応する。

八 白起王翦列伝に拠れば、秦が邯鄲を包囲したのは、昭王四十八年（孝成王七年）、六国年表に拠れば、その包囲が解かれたのは昭王五十年（孝成王九年）。「明年」を七「孝成王六年」としたことを承けて、孝成王七年のこととすれば、他の記事とよく照応する。

九 邯鄲の包囲が解かれて五年とすれば、事件は孝成王十三年のこととなるが、趙世家は十五年のこととする。梁玉繩はそれに拠って「五年」は「七年」の誤りとしている。その方が十「居六年」とよく照応する。

十 趙世家は「二十一年、孝成王卒。廉頗將攻繁陽、取之。使樂乘代之、廉頗攻樂乘、樂乘走、廉頗亡入魏。子偃立、是為悼襄王」と記す。廉頗藺相如列伝

と比較すると、事件の起った順序に違いが見られる。

十一 「其明年」とあれば悼襄王即位の翌年、悼襄王二年のことと看做される。趙世家も同じ。

十二 十一の記事と同様の記事が繰り返されているのであれば、「悼襄王元年」は「二年」が相応しい。

十三 趙世家は「三年、龐煖將攻燕、禽其將劇辛」とする。それに拠れば、「居三年」は「居一年」。

十四 六国年表、趙世家ともに、秦が扈輒を撃破した事件を幽繆王遷二年のこととする。それに照応させるとするなら、「後七年」は「後八年」。

また秦が宜安を攻撃するのは、翌年幽繆王遷三年。

十五 趙世家「四年、秦攻番吾、李牧与之戰、却之」とあり、「居三年」は「居一年」とするのが相応しい。

十六 六国年表は、王翦が趙を破り、王遷を虜としたのを、始皇帝十九年、幽繆王遷八年のこととしている。ただし、趙世家は幽繆王遷七年であつてここに同じ。

十七 「後三月」は『戦国策』では「後五月」。

四

以上、いささか辻褃の合わない記述を含むとはいえ、

廉頗藺相如列伝は、趙の秦との外交、軍事の關係を、それを担う人物をその都度交代させながらも、時間軸に沿って記載していることが確認されよう。

それでは、廉頗藺相如列伝によつてこのように切り取られた歴史時間は、一体どのようなものであつたのであろうか。

六国年表は、趙王遷八年の条に「秦王翦虜王、遷邯鄲。公子嘉自立為代王」と記し、翌年の条を「代王嘉元年」としている。そしてその六年には「秦將王賁虜王嘉、秦滅趙」と記している。つまり六国年表では、趙の滅亡は、秦始皇帝二十五年、趙代王六年のことと看做されているのである。

廉頗藺相如列伝では、趙王の命によつて李牧が捕らえられ斬殺されたことを承け、「後三月．．．遂滅趙」と記す。これに拠るなら、廉頗藺相如列伝は趙の滅亡を趙王遷八年のことと看做し、李牧の死を直接趙の滅亡に結び付けている。

また趙世家は、論贊においては「秦既に遷を虜にするや、趙の亡大夫、共に嘉を立てて王と為す。代に王たること六歳、秦、兵を進めて嘉を破り、遂に趙を滅ぼし、以て郡と為す」として、趙の滅亡を趙代王六年のこととはしているものの、本文にあつては「李牧誅

せられ、司馬尚免ぜらる。趙忽及び齊將顔聚之れに代る。趙忽の軍破れ、顔聚亡れ去る。王遷を以て降る。

八年十月、邯鄲、秦と為る」として、その本文を終えている。趙世家としては、実質的な趙の滅亡を「八年十月」と看做しているのである。

廉頗藺相如列伝も趙世家と同様な立場であつて、伝の末尾を趙の滅亡を以てしている。

一方、伝の冒頭はどのように始められているのか。

惠文王に先んずる趙王は、惠文王の父武靈王であり、彼は胡の地中山を攻略するために胡服するなど、積極的な応時変法の策を展開した。自ら将として中山を攻略した後は、北は燕、代、西は雲中、九原にまで至る、と記されるような赫赫たる功績を挙げた。趙世家は異例の紙幅を割いて彼の功業を記述する。つまり趙の国は武靈王の治世においてその最盛期を迎えたのであり、彼自身は稀代の英傑であつたとする認識を、そこから窺うことができる。

しかし、その最期が悲惨なものであつたことも同時に記される。武靈王は一旦は長子章を太子として立てたが、惠后呉娃に惑い、その子何を立てて王とし、自らは主父と号した。しかし、その後呉娃の死によつて、何への愛も弛み、加えて廢した公子章への憐れみも加

わつて、いづれをも王にしたいと猶予し決しかねてゐた。その結果、公子章の叛乱を引き寄せることとなつた。しかも叛乱に失敗して自らの宮に走つた章をかくまつた主父は、惠王の手の者に包圍され、宮を出ることもならず、食物さえ与えられないことがなかつた。雀の子を探し出して食べたりしていたが、三月余りで沙宮で餓死した、とするのが、趙世家の記事である。

趙世家は、叙事の文章の間に殊更に直截な議論の文章を差し挟んで、次のように述べる。

「主父、初め長子章を以て太子と為す。後、呉娃を得て之れを愛し、為に出でざりしこと數歳。子何を生む。乃ち太子章を廢して、何を立て王と為す。呉娃死し、愛弛む。故の太子を憐れみ、兩つながら之れを王とせんと欲す。猶予して未だ決せず。故に乱起り、以て父子俱に死し、天下の笑いと為るに至る。豈に痛ましからずや」。

かくて趙の国勢はその坂を降つていくことになるのであるが、であるとすれば、廉頗藺相如列伝は、趙の盛勢期を承けて、その下降期から記述を開始し、その滅亡までをその範圍としている、とすることができる。

ちなみに趙世家の論贊では、「吾、馮王孫に聞く。曰く、趙王遷、其の母は倡なり。悼襄王に嬖せらる。悼

襄王、適子嘉を廢して、遷を立つ。遷は素より行無く、讒を信ず。故に其の良将李牧を誅し、郭開を用う、と。豈に謬らずや」と記している。趙世家本文中の恵文王と武靈王との關係を示す記事とこの趙王遷と悼襄王との關係を表わす記事とを見比べてみるなら、そこには明確な対比を見て取ることができる。

五

趙は恵文王の時代から次々に危機を迎えることになるが、恵文王の治世下では、智勇兼ね備えた藺相如、趙奢そして勇氣を以て聞こえた廉頗によつてようやく支えられ、危機を脱していく。

廉頗藺相如列伝の記述が廉頗や藺相如などの人物をそのように布置していること、前稿に述べた通りである。しかも読む者をそのように導いていく配慮のいくつかをそこに見出すこともできる。

趙奢は、廉頗藺相如列伝では閼與の戦いにおいて初めて將軍として登場させられているが、趙世家ではすでに恵文王十九年に將軍として齊を攻撃した記事が見えている。趙奢を閼與の戦いにおいて初めて登場させることは、前稿に述べた人物をめぐる主題をより明確

にすることに役立っている。人物や事件の布置の構造を整理し際立たせることによつて、危機とそれを救う趙奢の姿がより鮮明なものとなっているのである。趙世家は趙に起る事件を網羅的に記述していくが、廉頗藺相如列伝は、同じく時間軸に沿いながらも、趙の滅亡への道を、廉頗、藺相如、趙奢、趙括、李牧に絞つて記述している。主題を際立たせるための整理単純化は、当の趙奢などの記述にまで及んでいるのである。

こうして良将やすぐれた外交官によつて支えられたにもかかわらず、しかし趙王が交代する度ごとに、危機は増大し事態の深刻さが増していく。

「後四年、趙の恵文王卒し、子の孝成王立つ。七年、秦、趙の兵と長平に相距ぐ。時に趙奢已に死し、而も藺相如は病篤し。趙は廉頗をして、將として秦を攻めしむ」。智勇兼ね備えた藺相如、趙奢はともに既に立つことができず、人物の指標としては勇のみを付与された廉頗が將軍として、この危機に立ち向かうことになる。とするなら、物語としては藺相如や趙奢の場合のように、事態がうまく解決されないことはあらかじめ定められていると言つてよい。「時に趙奢已に死し、而も藺相如は病篤し」と殊更に記されていること、そこには書き手が示す両者と廉頗との比較への配慮が読み

取られなければならぬ。まして「父子、心を異にす」と称される趙括が、廉頗に代ることとなれば、趙の敗北はあらかじめ決定されているのである。

孝成王が死し悼襄王が即位する場合も事態は同様に描かれる。「居ること六年、趙は廉頗をして魏の繁陽を伐たしめ、之れを抜く。趙の孝成王卒す。子の悼襄王立つ。樂乘をして廉頗に代らしむ。廉頗怒り、樂乘を攻む。樂乘走ぐ。廉頗遂に魏の大梁に奔る」。危機は李牧によつて救われることになるが、廉頗は不遇のうち悲劇の死を迎えることとなる。ちなみに樂乘には廉頗相如列伝は何の指標をも付与していない。ただ關與の戦いに際しては、「樂乘対うる。こと、廉頗の言の如し」と記して、趙奢が韓を救援しようとしたのに対し、廉頗とともに反対の立場にあつたことが明示されていることには注意が必要であろう。

趙世家は既に指摘したように、二十一年、孝成王卒す。廉頗將として繁陽を攻め、之れを取る。樂乘をして之れに代らしむ。廉頗、樂乘を攻む。樂乘走ぐ。廉頗亡げて魏に入る。子偃立つ、是れ悼襄王為り」としている。両者の記述を比較してみるなら、廉頗相如列伝では、廉頗は魏の繁陽を討伐しこれを陥落させるという大功を挙げたにもかかわらず、趙王の交代によ

つてその地位を追われた、従つてこの趙王の交代が趙の国に危機をもたらした、というニュアンスが強調されている。また列伝全体としても趙王の交代が一層の危機をもたらすという書きぶりが繰り返されるので、なおさらそのように読むように導かれることになる。ただし、中井積徳『史記離題』は「廉頗伝に据れば、樂乘の廉頗に代るは、当に悼襄王為りの下に在るべし」とし、梁玉繩もほぼ同じ。事実関係は趙世家の記事の方がより正確なのかもしれない。とすれば、むしろここにも主題へ向かつての誘導が仕掛けられていると見ることがよいのであろう。

趙滅亡に向かつて繰り返される記述は、ほかにも見出される。長平の戦いに趙が敗れるのは、趙王が將軍を廉頗から趙括に代えたからであるが、それについて廉頗相如列伝は次のように述べている。「趙王秦の間の言を信ず。秦の間言いて曰く、秦の惡む所は、独り馬服君趙奢の子趙括が將為らんことを畏るるのみ」と。趙王、因りて括を以て將と為し、廉頗に代らしむ」。相如は趙括が父趙奢には及びもつかないとして強く反対するが、「趙王聽かず。遂に之れを將とする」。趙括の母も「父子、心を異にす」として、將軍につけることを反対するが、「王曰く、母之れを置け。吾已でに

決せり、と」。次の母の言葉が趙括の敗北を予期させていること、言うまでもない。「括の母、因りて曰く、王、終に之れを遣る。即え称わざるが如きこと有らんも、妾、坐に随うなきを得んか、と。王、許諾す」。間諜の言を信ずること、これが敗北の引き金になっている（趙奢が秦の間諜を巧みに利用したことを思い起こす必要がある）のであるが、これに類することも繰り返して記述される。

孝成王が死に、子の悼襄王が即位すると、悼襄王は樂乘を廉頗と交代させた。怒った廉頗は樂乘を攻撃し逃亡させると、自らは魏の大梁に亡命した。長い間とどまっているが、魏は廉頗を信じ用いることができな。一方趙は秦に苦しめられ廉頗を必要とし、廉頗も再び趙に用いられたいとす。趙王、使者をして廉頗の尚お用うべきや否やを視しむ。廉頗の仇なる郭開は、多く使者に金を与えて、之れを毀らしめんとす。廉頗のひたすらな努力にもかかわらず、郭開のもくろみは成功して、廉頗は用いられない。そして記述上では、それが直截に廉頗の死に結びつけられている。

李牧の場合も同様である。趙王遷の七年、秦は王翦に趙を攻撃させる。迎え撃つ趙は李牧、司馬尚に防禦

させようとした。「秦、多く趙王の寵臣郭開に金を与え、反間を為して、李牧、司馬尚反かんと欲す、と言わしむ」。その結果、趙王はそれを信じ、李牧、司馬尚を交代させてしまう。そのことが李牧の死へと、更には趙の滅亡へと直接に結びついていくこと、すでに述べた通りである。

このように繰り返して述べられ、その度に危機が増大していく、という書きぶりは、そのことが趙の滅亡への一因であったことを強調するものにほかならないであろう。逆の側から言うのであれば、前述したように趙王の交代を丹念に記述しつつ、そのことで危機が増大する過程をもそこに組み込むことで、時間が折られたまれるように切迫したものとなり、また追い込まれるようになって、そこに読む者にとってはサスペンスが生まれてくる。繰り返してスパイや讒言する臣下を書き込んでいくことも、そのサスペンスを側面から支えている効果を生むものであると言える。

ところで李牧の死に関わって、『戰國策』は廉頗藺相如列伝とほぼ同様な記事を載せながら、異なつた消息をも同時に秦策に載せている。

文信侯呂不韋の出走にもなつて、司空馬は趙に赴き仕えることになつたが、結局は策が納れられず趙を

立ち去らねばならなかった。その時、司空馬は自分は趙王のために画策したが用いられることなく、趙はために必ず滅びるのであると言ひ、次のように続ける。

「趙、武安君を將とせば、期年にして亡びん。若し武安君を殺さば、半年に過ぎざらん。趙王の臣に韓倉なる者有り。曲を以て趙王に合ひ、其の交わり甚だ親し。其の人と為り、賢を疾み功臣を妬む。今、国危亡す。王必ず其の言を用ひ、武安君必ず死せん」。

武安君は李牧のこと。郭開の役どころはここでは韓倉となつてゐる。果たして韓倉は武安君を誘つたので、王は將軍を交代させた。そこまでの李牧に關わる事情だけを取り上げれば、廉頗藺相如列伝と同じである。また李牧が死に至ることも同様なのであるが、その経過、記述は大いに異なつたものになつてゐる。

韓倉は李牧を死に追いやるため、かつて李牧が戦争に勝を収めた時、王の賜つた酒杯を受け取り、王のために寿を言祝いだことがあつた。ところがその際、李牧はひじを張つて匕首を構えていた、そんな行為は死に相当する、と責めたてた。李牧は、自分は病氣のせいで身体の割に腕が短く、地に手をつくことができない。そこで義手を用ひている、と釈明し、袖から義手を見せながら、王に釈明してくれるよう請うた。しか

し韓倉は受け入れず、結局李牧は死に追いやられることになつた。武安君は北面再拜して死を賜ひ、劍をとつて將に自ら死なんとして、つぶやく。人臣たるもの、宮中では自殺できない。そこで司馬門をくぐり抜け、定めに従ひ小走りに走るのであつたがはなはだ速い、門を出でるやいなや右に劍を挙げ自害せんとしたが、今度はひじが短くてとどかない。やむなく劍を口に含み、柱を見定めて自らを刺し通した。

以上いささか残酷な味のするユウモアさえ感じられる挿話となつてゐるが、そこに描かれる李牧は、廉頗藺相如列伝の李牧には決して相応しくない。従順に死に赴く様、なによりも李牧が將軍であつたとしても、一年しかもたないとする司空馬の予言は、廉頗藺相如列伝とは相容れないものである。司馬遷がこの挿話に對してどのような位置にあつたか、今は問題ではない。両者を比較することによつて、廉頗藺相如列伝が物語をどのような方向へと組織しているのが明確になること、それが問題なのである。

(了)

注記 本論文では前稿同様、固有名詞を除き、引用においても当用漢字で代用した。また書き下し文も現代仮名遣いを用いた。